

閑話四条

一

沈黙は全ての中で最も良い表示である。“我は愛す——我は愛す”と囁くのは恋愛の究極の成就ではなく、天よ天よと叫ぶのもまだ極大の悲哀を表現するに足りない。そういう時の真の表示は化石のような、死の静寂であるはずだ。奇跡が眼前に起これば、目にした者はただ沈黙し、身震いするだけだ。安全帽の下から鳩が飛び出そうが、あるいは死人が生き返ろうが。不可能な事とあるはずのない事が起こるのは共に同じような奇跡であり、同じような不思議である。譬えばある人間が人間を生きたまま呑み込めば、後で吐き出そうが出すまいが、観客はきっと目を剥いて舌がこわばり話もできないだろう。そのうち吐き出したなら、それは上等のトリックになり、驚嘆佩服に値する。もし吐き出さないなら、それならつまりただ腹を膨らませただけで、ちょうど煮て食うとか蒸して食うのと同じで、やはり言語道断で、なんの言うべきことがある。“人食いのことを調べまして、公理正義とは明らかに合わないところがあります、……”などという言い方はただバカにしてできるバカ話ではないだろうか。

三月十八日以来、北京には少なからぬ奇跡が起こった。結果は沈黙、沈黙、また沈黙である。これは正しい。何故ならばこれが唯一のしかるべき対処法であるからだ。

しかしこれは又別の意味をも表示することができる。一つは恐れであり、二つは賛成である。だがわれわれ順良な市民においては、これはどんな比例をなしているであろうか、それはなかなか言いにくい。

二

天下の奇事は誠に独つではないばかりかやはり二つある。最近新聞は日本の政府も思想取締りの令を下そうとしたが、ただ残念なことに学界の反対を恐れたために、結局まだ発表していないと報じた。中国はと言えば、学界は六国飯店などの地に隠居した。この点は結局独つにして偶なりがたしで、日本の決して及ぶところではない。

思想取締という四字は、まことに妙極まり、昏極まりまた趣極まる言い方である。ロシアのなんとかいう小説に田舎者がかつて、“野っ原に風を追って、鬼の尻尾を抜く！”と言ったのは、ちょうど適切な評語である。風を追うのは尻を追うようなもので、追いつけないだけだが、鬼の尻尾を抜くのはあまり妥当ではない。それは鬼の小さな尻尾が抜けないばかりか、万一僥倖にも抜けたとすれば、——抜けたら又どうだというのだ？鬼の尻尾の前にはまだ一匹鬼がいるのではないか。ならどうするのか？これはまるで“倒抜蛇”*のようなもので、抜けたら運が良いが、あるいは同時に又不運でもある。日本の政治家が歴史知識に欠けているのは、残念なことである。彼らが躊躇したのはまだ取るべきではあり、畢竟以前の白色ロシアの官憲に比べてずっと賢明ではあるけれども。

中国では、いささか違うようだ。これは豚の尻尾を抜くとか言いようがない。大糖房胡同で

いつも見られるように。

天下の奇事は結局独つしかなく二つはない。

（民国十五年五月）

三

ふだんはみんなが重罪だと認める強姦が、動乱の時にはそれほど珍しくはなくなるようで、伝聞、ニュースから、知事の公文書に至るまで、みな堂々と言及し、まるで天橋の茶客が喧嘩をしたようなごく普通の裁判沙汰でしかない。そうだ、これは乱世では仕方がないのだ。乱世の特徴が乱であるからは。俗語に“乱世の人は太平の犬にしかず”と言う。動乱の戦地内の婦人の運命はたぶん二つだろう、（逃げたのと避けたのとは自ずと除外する、）一つは強姦を恐れて自尽するもの、二つは強姦されても生きているもの。第一の種類は自ずと彼女を烈女烈婦に仕立て上げる人がいて、さまざまな榮譽を加え、少なくとも歌の一首ぐらひはある。第二種の人はいはこれから同治・光緒時代の“長毛嫂嫂”のように人の軽蔑するところとなるだろう。彼女たちも可哀想で且つ——敬うべきなのであるけれども。忍辱と苦しみはおそらく人類生存の上で一つの重要な原素なのだろう。ちょうど忍辱と苦しみを認めないことが別の一つの重要な原素であるように。われわれは、現存する人民の大半が彼女たちの後裔であることを思うと、いい加減なことを言いたがるそれら八代九代の孫どもに対してほんとうにそれほど賛同できないと思うのである。

ある古書に云う、歴来の伝説によると、何千年か前、一度都が平定された時、一人の逃亡兵が婦人を強姦し、しかも彼女に言った、他人に強姦されると許さんぞ、と。男性の道德の精義がすべてここにある。彼はあるいはいい加減なことを言う鼻祖であったかもしれない。——おお、強姦がどうして閑話の材料になるのか。新聞で節約の記述を読むと、一言二言言いたくなるようなのだが、この題目は実に難しい。少し節約して、筆を“止め”にせざるを得ない。

四

難民——これは現在の北京の名物の一つである。ほとんど城内のどこかへ行きさえすれば何処にでも見られる。わたしは北京に十年ぶらぶらしているが、（前清の時にも一度来たことがある）、こんな現象はやはり初めてである。難民の家がどうかは、目撃したことがないので、考えもつかないが、こんな人工の乞食のような身なりは見るだけで不愉快である。そして特にわたしを不愉快にさせるのは難民の婦人の脚である。彼女たちの脚は自ずと今までずっとそうであつて、決して難に遭ってから縛つたのでも、あるいは難を逃れるために特に小さくしたのでもない。しかしながらそれは実に恐ろしいほど小さいのだ。わたしは以前確かに神秘的な纏足を見たことがあり、ほとんど“脚は何処にあるのか”と訝がるほど小さかった。いつもそれを見て自分は結局野蛮民族だと感じて“女の天足を見るのが最も嬉しいのに”という慨嘆を漏らすのであつた。今そういう脚が難民の体に生えているのを見て、いよいよ憮然を感ずるのである。決して難民は小さい脚を持つ資格がないなどと言うのではない。ただどうしてだか纏足と難民との不思議

な関係を感じて、まるで纏足が難民の原因であると言えそうな感じがする。わたしも自分が彼女らの同族であることは解っているが、心の中で君たちの遭難は当然だ、可哀想に、君ら野蛮民族は、と思うのを禁じ得ないのである。体に刺青をし、模様を彫り、色を塗り、耳・鼻・唇に輪を付けた男女は、かの機関銃・迫撃砲、それに飛行機——ああ、それに飛行機まで持った文明人に虐殺されて、きわめて自然で当然ではないか。おお、どうかこの悪夢から覚めて、あの国粹の難民、国産の小さな脚を見ないで済ませたいものだ。

しかしこの願望はあまりにも贅沢で、神は必ずしも聴こうとはされないかもしれない。

(民国十五年六月)

※初出：1926年5月24日『語絲』第80期・5月31日『語絲』第81期・
6月7日『語絲』第82期・6月14日『語絲』第83期

*倒拔蛇 未詳。